

1. 略歴

- 1987年3月 東京大学文学部英語英米文学専修課程卒業
1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程修了
1993年9月 マサチューセッツ工科大学大学院言語・哲学科博士課程修了
博士号 (Ph.D. in Linguistics) 取得
博士論文 AGR-Based Case Theory and Its Interaction with the A-bar System
1994年4月 神田外語大学外国語学部英米語学科専任講師
1997年4月 同 大学院言語科学研究科助教授
1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英語学/理論言語学

b 研究課題

phi 素性の役割、程度表現の構造と意味

c 概要と自己評価

2014年度は科研費基盤 (c) の課題「統語演算における数の素性の役割」の最終年度にあたる。

一致現象一般ということでは、マヤ語族のカクチケル語などで他動詞主語が焦点化などで移動するときに使われる動詞の特殊形態が示す人称がらみの奇妙な制約についての分析をおこなった。これは、Preminger 2014 が一致のメカニズムやその結果の形態的実現についてアドホックな仮定をもとに提案していたものを修正する形となっている。あらたな分析の骨子は、当該の制約は形態的実現にかかわる一般的制約に帰着するというものである。統語演算における一致のメカニズムに関しては、プラスとマイナスの両方の値が関与する素性のシステムだけが正しい結果を得るために必要な仮定であって、それ以外の一致のメカニズムには、とりたてて余計な仮説をもうける必要がないという望ましい成果が得られた。まだ未発表であるが、今後、発表先をさがすことになる。

その他、前年度、国際言語学会議で発表した成果のうち、日本語における可算・非可算の区別の存在を立証したものを論文の形にまとめ、議事録に収録された。

2015年度からは科研費基盤 (c) の課題「日英語の程度表現の統語構造と意味」をスタートさせることになった。2015年度は、日本語の「だけ」が指示詞に付随して程度表現を形成する場合や、節を伴って英語の量的関係節と呼ばれるものに対応する構文をなしている場合について分析を進めた。指示詞プラス「だけ」が名詞を修飾する構造は、難易度など性質についてさしている場合と量をさしている場合のどちらでも使えるのだが、量的意味を持つ場合のみ格助詞に後続する形 (たとえば「本をこれだけ読んだ」) を取ることができるという新発見につながり、量的意味を持つ場合は、前述の量的関係節の構文と共通の構造で、いわゆる量化子のうち「たくさん」のようなものと同列に扱うことができるという結果を得た。さらに、Carlson 1977 が提案した英語の量的関係節の古典的分析における中心的アイデアのいくつかを現在のより精緻な句構造のシステムに取り込むことで日本語の量的関係節の構文が分析できることも判明した。

この成果は、Formal Approaches to Japanese Linguistics 8 という国際学会の招待講演として発表し、その議事録に論文の形で収録される予定である。

d 主要業績

(1) 論文

Akira Watanabe, '1-deletion: Measure Nouns vs. Classifiers,' *Japanese/Korean Linguistics* 22, 245-260 頁, 2014

Akira Watanabe, 'Valuation as Deletion: Inverse in Jemez and Kiowa,' *Natural Language and Linguistic Theory* 33, 1387-1420 頁, 2015

(2) 学会発表

国内、渡辺明、'Numerals as a Cognitive Technology and the Innate Natural Number System,' 明治学院大学 (白金キャンパス)、2014.10.25

国際、Akira Watanabe, 'Amount Relatives in Japanese,' *Formal Approaches to Japanese Linguistics* 8, 三重大学、2016.2.20

(3) 会議録

国際会議、Akira Watanabe, 'Count syntax and partitivity,' 2013.7.22

19th ICL Papers, (http://www.cil19.org/uploads/documents/Count_Syntax_and_the_Partitivity.pdf), 2015

3. 主な社会活動

(1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

Journal of East Asian Linguistics (出版元 Springer)、編集委員、2014.4～2016.3

Linguistic Inquiry (出版元 MIT Press)、編集委員、2014.4～2016.3

Acta Linguistica Hungarica (出版元 Akadémiai Kiadó)、編集委員、2016.1～2016.3